
第2章 計画

浜松市は繊維、楽器や輸送機器などの製造業を主とする「ものづくり」の企業城下町である。IMは受注生産型企業で労働者一人に求められる作業時間も長く、業務指示や作業工程上における日本人とのコミュニケーションが欠かせないため、外国人従業員に対する日本語教育を行うことで品質や生産性の向上、業務上のトラブルを未然に防ごうという狙いがあった。しかし、ほとんどの外国人はこうした受注生産型企業で働いているのではなく、単純作業を中心としたライン生産の量産型製造業に従事している。量産型企業では、作業上の指示はある程度の日本語能力を有する外国人を通訳も兼ねて一つのラインに一人配置すれば、母国語で作業指示が円滑に行われるため、他の外国人に日本語能力を求める必要性は低かった。そのうえ、外国人派遣労働者を受け入れている企業にすれば、日本語教室に通うことで人手が少なくなり作業工程を止めるわけにはいかないといった事情から、企業内日本語教室に対して理解は示すものの、実施については消極的であったことは確かである。それは、これまで HICE の職員が様々な量産型企業を訪問し教室について紹介して一定の理解を示してもらっても、なかなか実現には至らなかったことから明白である。むしろ派遣労働者の外国人に日本語教育を行うことが受け入れ企業の責任であると考えた企業は少なかった。まして外国人労働者を派遣している業者側は、社員教育に日本語教育を取り入れているところは稀であった。

しかしながら、そうした量産型企業のなかでも、業務請負として受け入れてきた外国人従業員に対する日本語教育支援に乗り出した企業があった。それがヤマハファインテック株式会社とテイボー株式会社である。

この章では、ヤマハファインテック株式会社における企業内日本語教室の教室づくりに着目し、企業と地域と行政の連携による外国人労働者のための企業内日本語教室の教室づくりについてまとめた。

I. ヤマハファインテック株式会社企業内日本語教室開催までの流れ

● HICE 側の経緯

HICE・企業内日本語教育カリキュラム開発検討委員会は、IM において企業内日本語教室のノウハウを確立させていくなかで、外国人労働者を受け入れている或いは雇用している他の企業にも、この教室が「地域の多文化共生社会づくり」に貢献できることを押し出して、協力を要請していきたいという思いが強くなった。

平成 19 年末に前年度委員であった商工会議所前事務局長の白井委員の協力で製造業数社に同行いただき、代表取締役や管理部門長などをご紹介いただいて話し合いを重ねた。なかでも、ヤマハ株式会社（以下、ヤマハと称する）では総務部、人事部をつないでくださった。人事部によると、本体では外国人を雇用するもヨーロッパ系外国人でその部署は英語で業務が進められるため日本語教室は開講できないが、関連企業に対するアンケートを実施してみて希望が出た企業に対してアプローチをかけてみたらどうかと提案いただいた。

HICE はここで企業へのアプローチは単独で行うのではなく、同業他社の企業或いは商工会議所のような既に企業との強い人脈などのパイプを有する関係者に協力していただくことが大きなステップであることに気がついた。

12 月 25 日にヤマハ本体から関連企業へ発送されたアンケートでは、どの企業からも早急かつ誠実な回答を得られた。なかでも、1 月 21 日に届いたヤマハファインテック株式会社からは、企業内教室を「前向きに検討してもよい」と回答を得て、開催する可能性が最も高かった。そこで、早速ヤマハ(株) 人事室長 と共にヤマハファインテック株式会社(以下、ファインテックと称する) を訪問することとなった。

HICE は、2 月 19 日にファインテックの社長をはじめとする管理部と初めて面会し、企業内日本語教室について、IM の事例などを使って説明し開催の了解がなされた。もともとファインテックでは外国人従業員に対して日本語教室を行うことを考えていたようだ。

● ファインテックの経緯

楽器製造技術を生かして携帯電話やカメラの部品、車の内装などを手掛けるファインテックでは、業務請負の雇用形態で働く外国人が多くいた。これまでも独自に外国人に対する教育を行っており、特に年末行った警察の交通安全教室で外国人が目を輝かせて参加していたようだ。そんな姿を見ていた管理職の日本人が、外国人が日本で生活するうえで知りたいと思うことがたくさんあるはずで、もっと日本語ができれば彼らの生活がよくなるだろうと考えた。企業にとっては外国人に対する福利厚生のような視点で何かできないだろうかと考えていた。「困っている外国人がいるなら助けてあげたい」という思いで日本語教室の開催を決定した。

ちょうど HICE がアンケートを行った時期が同じでタイミングが良かったのだろう。

II. 計画

ファインテックの教室では、IM で培った経験を生かして三者の連携は強化された。ファインテックの教室開講の目的は「企業の社会的貢献のため」にある。請負業務の外国人従業員に対して、職場での意思疎通は外国人リーダーが配置されており、雇用形態上日本人従業員から直接指示が行えないため職場上の日本語コミュニケーションは必要がない。しかし、彼らがより安心・安全な生活を送るには日本語を習得する必要があるだろうということから日本語教室の開設を決定した。HICE がその教室をコーディネートするにあたり行った手順は以下のとおりである（表 1 参照）。

- ① ファインテックに HICE の賛助企業に加入してもらう
- ② ファインテックのニーズとレディネス調査を行う
- ③ 調査で得られた情報を分析し、ファインテックに最適なコースを作る

その流れに沿って以下のように教室づくりが行われた。

（1）学習者

当時ファインテックには 336 人の外国人従業員が従事していたため、今回はカメラと携帯パーツ製造部門の外国人のみを対象とした。請負企業を通して日本語教室への受講希望者がどのくらいいるのかを調査した。その結果、なんと 116 人が受講を希望した。

その受講者の日本語レベルを測るため、口頭能力チェックテストを行い、クラス数を決定させることを試みた。このテストには HICE および講師のほかに、ファインテックの部長を始め管理部の皆さんにも協力していただいた。（資料 2）

（2）教室体制

まず 3 月にファインテックで働く外国人従業員に対して実態調査を行った。その結果、月末のアンケート回収時には企業の想像を超える 99 名から受講希望者が集まり、1 回の教室では受け入れに困難であったため、工場現場と管理部との十分な調整を行った後、教室を火曜日と金曜日の週 2 回行うことにし、入門（まったくできない人）・初級（日本語でのやり取りが少しできる人）・中上級（日本語でのやり取りが十分できる人）の各 3 クラスに分けることにした。そして、週 2 回のどちらの曜日に参加するかはファインテック側が勤務状況や業務請負企業との話し合いの結果決定し、請負会社ごとに曜日が設定された。そのうえで 7 月 29 日（火）の終業後、全受講希望者を対象に口頭能力チェックテストを行い、その結果でレベル判定され、すべての受講者は各曜日の 3 クラスに振り分けられた。

さて、教室の時間帯は、外国人従業員の勤務体制に合わせた。ファインテックでは日勤だけでなく、二交替制で勤務している人もあり、終業後と就業前に日本語が学べるよう夕方 5 時～6 時半の時間帯で教室が開催された。

また、一週間に 2 度同じ教室があるということで、残業などが理由で教室を欠席しなければならなかった場合、その週のもう一つの曜日に参加することができるようにした。

(3) スタッフ体制

● 企業側の人員配置

まずファインテックでは、工場責任者ではなく管理部の I 課長が教室担当として配置された。HICE は IM の教室で、豊かなコミュニケーションを生み出すために日本人従業員の教室参加が欠かせないことがわかっていた。そのため、ファインテックでも日本人従業員の参加を依頼した。しかも、その参加は IM のときのように見学しているというものではなく、日本語講師の教授補助や受講者の会話練習の相手となって深く関与する役割でなければならないことを説明した。

そこで担当の I 課長は、管理部会議の場で教室開催の告知をした際にボランティアでの教室参加協力を要請したようである。その結果、社長から直々に管理職に対して協力指示が下り、毎回同じ人というわけにはいかないが毎週火曜日と金曜日に教室を担当する、いわば講師アシスタントが決定した。

その日本人管理職の方々は直接外国人従業員と関わる職場の人たちではなかったが、会議や出張の際には曜日を交代してくれるなど、きめ細やかな対応をしてくださった。また、一般社員の方たちも、同じ職場はもちろん他の部門も含め、非常に協力的に参加いただいた。

● 講師の人員配置

HICE は第一にファインテックの教室には IM の教室で得られた知見と経験を生かすべく、IM で教えていた講師を動員した。そして、HICE のボランティアバンクから、企業の謝金の条件をクリアし、工場の立地する地元に住んで教室時間に活動ができ、なおかつ HICE や企業が意図する教室スタイルを理解して教室活動ができる日本語ボランティアを選定し、講師を依頼した。そのうえ、大学生の社会参加を促すために大学生アルバイトを講師として導入した。

IM と同様に日本語講師 2 名と大学生 1 名で、各曜日ともに 3 人体制を整えた。講師、大学生には企業から講師謝礼金と交通費が支払われた。

(4) コースデザイン

9 月 19 日 (金)、ファインテックにおいて企業、講師、HICE によるコースデザイン会議が行われた。受講者は何を学びたいのか、楽しいことも取り入れたいということで、全 10 回のコース内容を組んだ。

その会議の最中、突然社内アナウンスが流れた。どうやら休み時間にファインテックのお知らせやイベント情報などがアナウンスされるようだ。緊急時にもアナウンスが流れるのか聞いたところ、守衛室から広い工場全体にアナウンス放送が流れるそうだ。外国人従業員もそのアナウンスが理解できているのだろうか。緊急時ではどこでどのような状況なのか、避難場所はどちらがいいのか、理解できるようにすることが望ましい。そこで、

コースのなかに守衛アナウンスを取り入れることにした。

他にも消防署、産業医にも協力を依頼した。消防署では、飯田出張所が消防車や防災訓練、地震時の対応を指導することになり、産業医には IM と同様に病院のかかり方、病気の表現について学べるようにした。レストランでの会話では、大手ハンバーグレストランの「さわやか」にメニュー使用の許可をもらい、注文時の会話を実践練習した。

いずれの回でも、日本人従業員が看護婦やレストランのウェイターに扮するなどの工夫を凝らし、楽しい教室づくりを目指した。

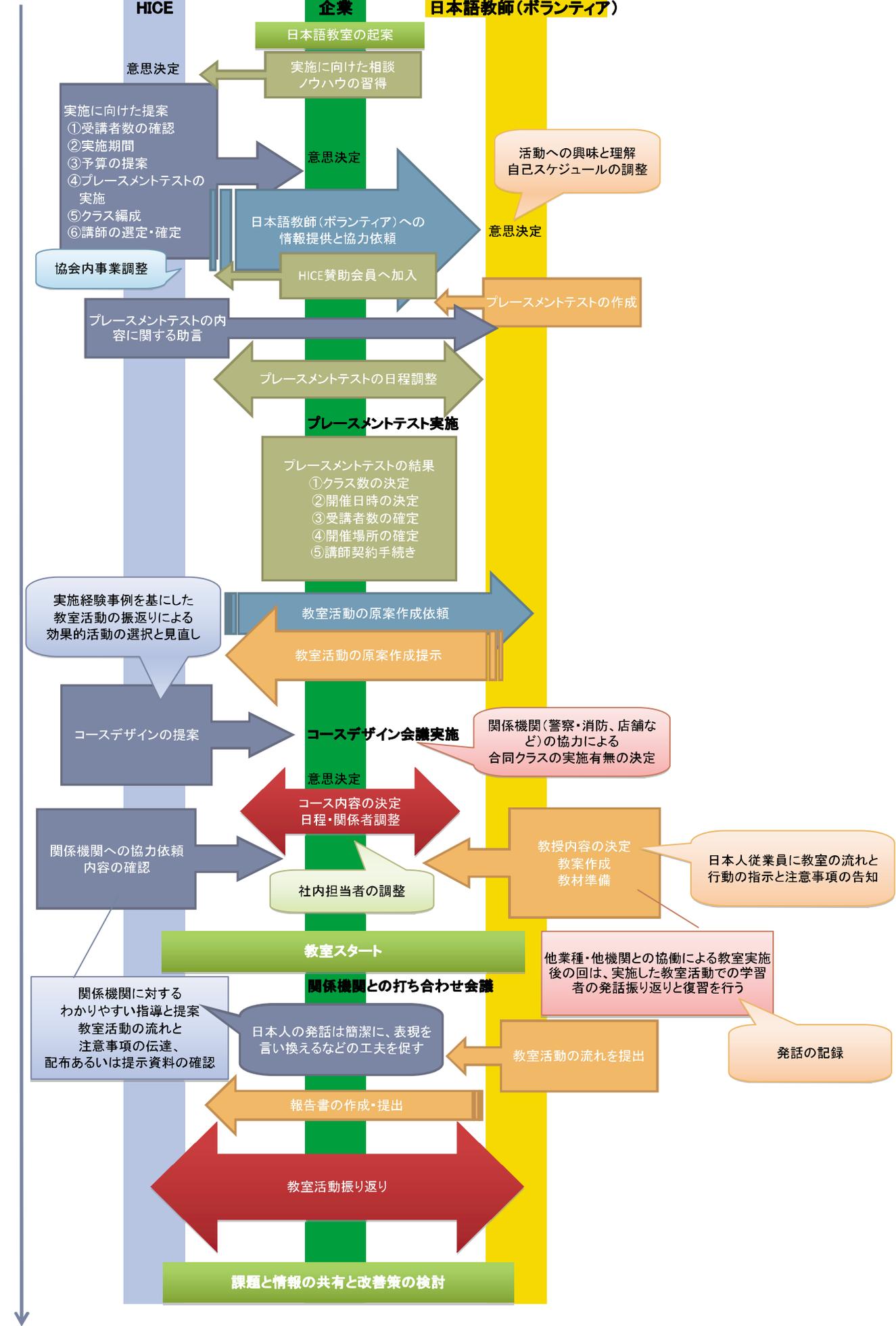
さらに、「会話をしたい」という学習者のニーズに対応すべく、「おしゃべりタイム」を導入。毎回授業終了前の 20 分間を日本人との自由なおしゃべり時間とし、講師が掲げたテーマを口火切りに、身振り手振りや絵を描いたりしておしゃべりを展開し、お互いの文化の違いにも触れるなど、会話を弾ませた。

また、合同授業では全クラスが合同で授業を進めていった。そして IM での反省を踏まえて、次の回には合同クラスでフォローしきれなかった表現の指導や理解の確認を行うことにした。そのうえ、日本人従業員に対する教室周知を図るべく、最終回には各レベル、日本人を含む小さなグループ別に分かれて新聞づくりを行うことにした。

こうした話し合いの結果、出来上がったコースは下記のとおりである。(P.99、付記Ⅲ学習調査参照)

- 第 1 回 開講式、自己紹介
- 第 2 回 守衛さんの緊急アナウンス (火災発生時の放送)
- 第 3 回 安全教育
- 第 4 回 合同授業① 消防署
- 第 5 回 第 4 回の振り返り
- 第 6 回 レストランで注文する
- 第 7 回 病気の症状、病院
- 第 8 回 合同授業② 産業医 (問診票)
- 第 9 回 第 8 回の振り返り
- 第 10 回 修了式、日本語教室紹介新聞づくり

表1 <企業内日本語教室のプロセスと意思決定の仕組み>



口頭能力チェックテスト

なまえ	
-----	--

識字	読める	書ける	程度によって(○、△、×を記入してください)
ひらがな			
カタカナ			
漢字			

		単語のみ	一文	備考
1	(お)なまえ は？			
2	いつ日本へ来ましたか			助詞、往来
3	誕生日は何月何日ですか			月日
4	仕事は何時から何時までですか			時間
5	仕事は忙しいですか			様態
6	今朝、何時に起きましたか			時間、自動詞
7	昼ごはん、何を食べましたか			他動詞
8	誰と食べましたか			助詞
9	昼ごはんはどうでしたか			嗜好
10	ご飯は誰が作りますか			他動詞、他者
11	いつもどんな料理を作りますか			習慣
12	日本料理が好きですか			嗜好
13	日本料理のなかで何が好きですか			嗜好
14	(机の上、財布の中、かばんのなか)に何がありますか			状態
15	携帯電話を持っていますか			所有
16	仕事のとて、携帯電話を使ってもいいですか			許可
17	携帯電話でメールをすることができますか			可能
18	携帯電話でブラジルへ電話をしたことがありますか			経験
19	(18の回答で)いつもどうやってブラジルの家族に連絡しますか			方法、習慣
20	ブラジルへ帰りたいですか			希望
21	(20の回答で)ブラジルへ帰ったら、何をしたいですか			条件節、意向
22	日本へ来る前に、何をしていましたか			過去経験
23	今、家族と一緒に住んでいますか			自動詞
24	どこに住んでいますか			場所
25	あなたの住んでいる街はどんなところですか			様態
26	(友達、家族)が浜松へ来たら、どこへ連れて行ってあげたいですか			意向
27	(26の回答で)どうしてですか			理由
28	今、何がいちばんほしいですか			要求
29	漢字がわかりますか			理解
30	日本語教室で何を勉強したいですか			希望意思

一連の流れで会話を進められるようOPI形式でのチェック項目を作成しました。(易→難→易のスパイラル)

10までの回答が30%以下なら入門、14までの回答が50%以上なら初級に入れます。

15～17で初級か中級かの判断をしてください。

21、25、26で中級か上級の判断をして、25、26、27が一文或いは複文になって発話されたら中級上と考えます。

29、30は本教室での要望です。必ずメモを取ってください。

結果 クラス 入門 初級 中級 上級
(○をつけてください)